

	調査地点数		1期計画					2期計画					調査範囲	調査内容	調査時期	調査頻度	目的	目的を踏まえた実施状況に対するコメント	
	柵内	柵外	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25							
1. 大台ヶ原を特徴づける生態系の保全																			
a.緊急に保全が必要な箇所における対策の強化																			
取組	植生保全対策実施場所の検討						○	○	○	○	○	●	●		区域保全対策、単木保護対策の実施場所と手法について検討	6～7月	毎年		
必	毎木調査(詳細)	8	6					○					●	植生タイプ別柵 30m×30m	樹高、胸高直径、位置	9～10月	1回/5年	各植生タイプにおける、森林の階層構造の変化や森林更新の状況を把握する。また、防鹿柵の内外における生存状況等を比較することで、各植生タイプにおける防鹿柵の効果を検証する。	
必	植生調査	8	6					○					●		植物社会学的手法による	9～10月	1回/5年	各植生タイプにおける、植物群落の被度や種組成の変化を把握し、ニホンジカ個体数調整及び防鹿柵の効果を検証する。	
1	林床植生調査	8	6	○	○	○	○	○	○	○	○	—	—	植生タイプ別柵 2m×2m×9	種別植被率(%)、最大高	9～10月	各期1回+回/2年	各植生タイプにおける、高さ1.3m未満の林床植物の出現種や種別の最大高の変化を把握する。また、防鹿柵内外の多様度的変化を比較することによりニホンジカ個体数調整及び各植生タイプにおける防鹿柵の効果を検証する。	
必	環境条件調査	7		○	○	○	○	○	○	○	○	●	●	植生タイプ別柵	気温(H15～)、雨量	通年	毎年	各植生タイプの年間の気温を把握し、各種調査の分析に使用する。	
2	植生変化モニタリング	2							○	○	○	●	—	多様性 防鹿柵内	コドラート内の種別被度(%)	7～8月	1回/2年毎年	多様性の保護を目的として設置した平成20年度設置の2箇所の防鹿柵の効果を検証する。	調査頻度について検討が必要である。
3	植物相調査			○	○	○	○	○	○	○	○	●	●	新規 防鹿柵内	防鹿柵設置後直後に順次調査を実施	春季、夏季、秋季	毎年 (H24以降、2回目の調査を行う防鹿柵を 選別して行う)	防鹿柵の効果を検証する。	初期値の蓄積であり、どの柵についても2回目の調査は行われていないため、調査を行う柵の絞り込みを行ない、H24、25で2期計画の評価のための情報を収集する。また、3期計画では頻度について検討が必要。
2. 森林の更新環境の回復																			
b.過剰な動物影響や菌害の抑制による実生の成長促進																			
必	稚樹生育状況調査 (東大台)	7						○		○			●	小規模防鹿柵内 (東大台)	種名、高さ	10～11月	1回/2年 (3期計画では頻度 について要検討)	森林の後退箇所に設置した小規模防鹿柵の、稚樹の生育に対する効果を検証する。	調査頻度について検討が必要である。
必	稚樹生育状況調査 (西大台)	12	12							○			●	小規模防鹿柵内 外 (西大台)	20cm以上の稚樹を対象、種名、高さ	秋季	1回/2年 (3期計画では頻度 について要検討)	ギャップ地に、ギャップサイズに合わせて設置した5箇所の小規模防鹿柵(パッチディフェンス)の、稚樹の生育に対する効果を検証する。	調査頻度について検討が必要である。
1	植生調査	12						○	○	○	○		●	小規模防鹿柵内 (西大台)	種別被度・群度	秋季	1回/2年 (3期計画では頻度 について要検討)	ギャップ地に、ギャップサイズに合わせて設置した5箇所の小規模防鹿柵(パッチディフェンス)の、草本層と低木層に対する効果を検証する。	調査頻度について検討が必要である。
c.林床のミヤコザサの抑制																			
取組	大規模ササ刈り									○	○	●	●	2箇所柵内外	大規模なササ刈り(2ha)を実施。	9月	毎年 (3期計画では実施を 含め要検討)	森林更新環境の回復のための取組として、更新を阻害しているミヤコザサを衰退させる。また、大規模にミヤコザサを刈り取り、衰退させることにより、ニホンジカの環境収容力を減少させる。	
必	大規模ササ刈りに係る下層植生モニタリング									○	○	●	●	2m×2m	ササの回復、下層植生の回復	9月(ササ刈り前)	毎年 (3期計画では実施を 含め要検討)	大規模にササを刈った場合に、更新を阻害しているミヤコザサを衰退させるかどうか、また森林更新が促進されているかどうか検証する。	
1	大規模ササ刈りに係るニホンジカ生息密度調査									○	○	●	●	2箇所柵内外	ニホンジカの生息密度	10～11月	毎年 (3期計画では実施を 含め要検討)	大規模にミヤコザサを刈り取った場合に、ニホンジカの環境収容力を減少させることができるかどうか検証する。	
2	大規模ササ刈りに係る土壌流出モニタリング										○	●	●	各試験区において、 防鹿柵内(3) 防鹿柵外(3) 対照区(3)	土壌流出	7～9月	毎年 (3期計画では実施を 含め要検討)	大規模にササを刈った場合に土壌が流出する等の影響があるかどうか検証する。	
d.森林の更新環境の回復																			
1	実生生育基質調査	3	2	○	○	○	○	○	○	○	○	—	▲	倒木5、根株5	種名、高さ、コケの種類	9～10月	H24でまとめを行い 終了	トウヒを含む針葉樹の実生とそれらが生育している定着基質(倒木・根株)、実生とコケの種類の関係について把握する。	傾向はつかめたので、H24(1)にとりまとめを行い、終了する。

※取組:中期目標・短期目標に基づく具体的取組、必:必須調査、数字:追加的調査の優先順位

植生保全対策・森林生態系保全再生事業の具体的取組項目および具体的取組に係る調査項目・実施年度

3. 森林後退の抑制																				
e.森林後退の場所における森林減少の抑制																				
取組	既存稚樹の分布確認													東大台 植生タイプ I、 林縁部	H22に既存稚樹の分布確認。H23に保護手法を検討後、モニタリングを実施	8～10月	H22	将来、母樹となることが期待される既存の自生稚樹の分布状況を 確認し、保護する		
1	既存稚樹のモニタリング										○	●	—				1回/2年毎年		PVさんをお願いしてはどうか？	
2	移植苗木の保全業務	1		○	○	○	○	○	○	○	○	○	▲	▲	正木峠 (必要なもののみ)	坪刈り	7～8月	毎年	平成5年度、平成13～15年度に移植したトウヒ等の苗木のうち、ミヤコザサの繁茂が著しい正木峠の防鹿柵内について、ミヤコザサによる被陰を防ぐ。	PVさんをお願いしてはどうか？
4. ミヤコザサ草地から森林への遷移																				
取組	苗木植栽(苗木残存木)														苗木残存木の植栽	9～10月	H25で終了	全ての森林更新過程が損なわれた箇所(ミヤコザサ型植生)において、森林への遷移を誘導するためにコアとなる母樹群の形成を促す。		
取組	苗木植栽(新苗木)														新規生産苗の植栽計画策定及び植栽		H25で計画策定			
取組	播種モニタリング														生残数、苗高	秋季もしくは春季	H25で終了	3期計画での植栽計画作成時に生かす。		
1	移植苗木生育追跡調査	4		○	○	○	○	○	○	○	○	○	—	正木峠、苔探勝路、VC裏、上道水場付近	樹高、根際径、衰退度、葉色	10～11月	1回/52年	平成5年度、平成13～15年度に移植したトウヒ等の苗木について、生育状況を把握する。	移植苗木は全て移植してから5年以上経過しており、調査頻度を5年に1回程度に減らしても特段影響はないのではないかと考えられる。	
2	自生稚樹生育追跡調査	1		○	○	○	○	○	○	○	○	○	●	●	正木峠 ライトランセクト	樹高、生存率、番号札のメンテナンス		毎年	防鹿柵によるニホンジカの採食による影響を排除した効果を検証する。	木佐貫先生と要相談。
3	種子採取													豊作に合わせて実施		9～10月	豊作に合わせて実施 毎年	播種及びイベントに供する種子を確保する。	PVさんをお願いしてはどうか？	
4	苗畑における苗木生育追跡調査			○	○	○	○	○	○	○	○	○	—	苗畑	総本数。苗高	10月下旬～11月中旬	H23終了	苗畑内のトウヒ苗の状態を把握する	とりまとめを行い、終了する。	

その他の調査項目・実施年度

資料3-2

5. 西大台利用調整地区に関する調査																			
必	植生調査	4												2m×2m×3 ×3セット	種別被度(%)、土壌硬度(詳細調査時)、定点写真(毎年)	7～8月	詳細調査:1回/5年 定点写真:毎年	利用調整地区を設定したことによる、歩道周辺等における踏圧や種子の持ち込み等による植物相への負荷の軽減度合いを把握する。	
1	植生回復調査	6												10m×10m	詳細調査(種別被度・群度)、定点写真	7～8月	詳細調査:1回/5年 (初期値は2年実施) 定点写真:毎年	利用調整地区設定の効果をより正確に検証するため、利用調整地区設定前に出来た踏み分け道において、さらにニホンジカの影響を排除し、植生の変化を把握する。	
2	希少植物調査													歩道沿い	希少種の位置、個体数	6月	選定した指標種を対象に毎年	希少種の分布や現存量、盗掘等による被害状況を把握する。	
3	種子持ち込み調査														VC等で回収する利用者の靴底泥のまきだし	泥の回収は5～11月、まきだしは適宜実施	調査は適宜	利用調整地区内への国外外来種の種子の持ち込み状況について把握する。	
4	蘚苔類被度調査	12													蘚苔類の被度	秋季	被度調査、詳細調査とも2年間で全地点を調査	利用調整地区設定による歩道周辺における地表性蘚苔類への負荷の軽減度合いを把握する。	
6. 大台ヶ原全体の変化に関する調査																			
必	ササ類被度調査													1メッシュ 100m×100m	被度・高さ・病気の有無	6～8月	1回/5年	ササ類、コケ類の被度の経年変化を把握する。	
必	コケ類被度調査														被度	6～8月	1回/5年		
1	定点写真撮影														景観変化調査:16地点 植生回復モニター調査:3地点	10月	1回/2年毎年	大台ヶ原の景観の変化を把握する。	
2	外来種に関する調査														ドライブウェイ等の法面や駐車場に生育する外来種の把握調査	7～8月	調査は適宜	ドライブウェイ等の法面や駐車場に生育する外来種を把握する。	
3	森林内小溪流水位調査													ナゴヤ谷 調査地点	ナゴヤ谷において水位および降水量の自動計測を行う		H23終了 (降水量調査については環境条件調査で行う)	オオダイガハラサンショウウオの繁殖場である森林内小溪流の水位変動を把握する。また水位計設置地点付近における降水量を把握する。	

○、□:調査済み ●:調査予定 ■:詳細調査、▲:項目、地点を限定し実施

※取組:中期目標・短期目標に基づく具体的取組、必:必須調査、数字:追加的調査の優先順位